

## テサロニケ人への手紙 # 8

「テサロニケ再訪の願い（1）」 | テサロニケ人への手紙 2 章 17 節～3 章 10 節

2020.09.27

### はじめに

先回は、I テサロニケ 2 章の前半でパウロがテサロニケに滞在した時に、どのように具体的に伝道したのかを学びました。パウロは福音宣教者として、福音を無償で届けるために、そして救われて間もない彼らが金銭的につまずかないように自ら働いて自活伝道をしました。また牧会者として一人一人を母親のような優しさで養い、父親のように励まし教えました。今日の箇所では、パウロがテサロニケを去った後、なぜすぐにもう一度テサロニケを再訪出来なかったのか、どうして自分の代わりにテモテを遣わしたかについて説明しています。

### 1. サタンの妨害

**2:17 兄弟たち。私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されてきました。といても、顔を見ないだけで、心が離れていたわけではありません。そのため、あなたがたの顔を見たいと、なおいっそう切望しました。**

ここでパウロはテサロニケを去って後の、彼らへの思いを記しています。「**しばらくの間**」とは期間の短さを強調しています。そして「**引き離されてきました**」とは、親と引き離されて孤児状態であることを意味しています。パウロにとって霊的に生まれたばかりのテサロニケ教会との別れは、まさしく幼い子供と引き離された親のような心境であったことが伺えます。

「**といても、顔を見ないだけで、心が離れていたわけではありません。**」クリスチャンの友情、交わりは物理的に離れていて会うことがかなわない状態にあっても、心を通わすことができます。同じ神を父とする兄弟姉妹として、とりなしあうことができるのはクリスチャンの大きな特権でもあります。

4 月のイースターからの 6 週間、コロナウイルスの感染拡大のために、私たちが教会での礼拝を中止しました。現在もお仕事の立場上、また健康上、礼拝に集えない兄弟姉妹もおられます。この期間、私たちは共に集い礼拝することの大切さを改めて教えられました。兄弟姉妹が教会に集まり、共に心を合わせ神を賛美し、祈り、御言葉をいただく。当たり前に戻ってきたこの礼拝という行為が、私たちクリスチャンにとってどれほど霊の糧となり、力となっていたのか。礼拝は神が人間に与えて下さった、最高のリフレッシュ・サイクルなのだと再確認いたしました。

パウロもテサロニケの兄弟姉妹ともう一度顔を合わせて礼拝を捧げ、御言葉を教えたいと切に願っていました。コロナ禍で礼拝に集うことがかなわなかった私たちには、少しその思いが理解できる気がいたします。今はオンラインで遠くに離れていても連絡をとることができますし、顔を見ることもできる時代ですが、当時は手紙か使者を遣わすしか方法がありません。牧会者パウロのテサロニケの兄弟姉妹に会いたいという思いが手紙からあふれ出ています。

**2:18 それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。私パウロは何度も行こうとしました。しかし、サタンが私たちを妨げたのです。**

パウロは行動の人ですので、何度もテサロニケに再訪しようとしたようです。しかしここではサタンが妨げたと述べています。「**サタンが私たちを妨げた**」この表現が、何を意味しているかは明らかではありませんが、おそらく、ヤソンが補償金を払ったときに、パウロが再びテサロニケに戻らないという条件も含まれていたのではないかと思われます。そのためにパウロは法的にもテサロニケに行けなかったのでしょう。無理に訪れればまた暴動が起きかねませんし、今度は逮捕される可能性があります。

私たちクリスチャンは神様を信じています。と同時にサタンが実存していることを知っています。サタンという霊的存在は聖書では「惑わす者」「この世の神」「空中の権威を持つ支配者」と呼ばれています。サタンは神の働きを妨害し、神の子たちを神から引き離すために働きます。パウロがテサロニケを去った後、反対者たちはこう言ったことでしょう。「お前たちを惑わしたあのパウロはお前たちを見捨てて逃げてしまった。もう戻っては来ないだろう。」自分たちがそこにいられないようにしておきながら、そう言いふらしました。これがサタンの常とう手段です。惑わし、偽り、混乱、怒りを用います。

先週、私はパウロに比べれば万分の一でしょうが、ある小さい体験をしました。教会外の方から根も葉もないうわさによる中傷を受けたのですが、それを聞いた時にちょうどこの聖書箇所を準備していましたので、怒らずにこう考えることができました。そのような中傷や根も葉もないうわさは教会を建てあげずに、混乱させることが目的でありサタンから来ている。であるならば、逆に私たちの教会は神の御心に沿って進めているのだと感謝し、サタンに用いられてしまった人のための祝福を祈ることができました。御言葉に生きる、御言葉を生活に適応して生きることを教えていただきました。

## 2. 主の再臨への期待

**2:19 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。**

## 2:20 あなたがたこそ私たちの栄光であり、喜びなのです。

このテサロニケ人への手紙の根幹となっているのは主の再臨です。私たちは、主イエスキリストの再臨をどのように信じているのでしょうか。まるで夢物語のように考えているのでしょうか、それともやがて起こる現実として信仰で捉えることができているのでしょうか。初代教会の宣教、パウロの宣教の中心は復活と再臨です。そしてそれは私たちクリスチャンの聖書信仰の土台でもあります。何故なら、教会の土台は使徒たちと預言者の上に立てられているからです。

パウロはここで感情に任せて、テサロニケ教会を讃えているのではありません。表面的に読むと大げさな表現のように思えるかもしれませんが、この手紙の根幹である主の再臨と深く結びつけて、彼らへの思いを表現しているのです。およそこの世において苦勞が多く、報いの少ないと言われる福音宣教者にとって最大の喜びとは何かと言えば、宣教によって人が救われ、変えられ、信仰の道を立派に歩むことです。「誇りの冠」とありますが、これは名誉とも訳せる言葉で、パウロにとってテサロニケ教会こそは神の勝利であり、福音の勝利、そして神からの報いなのだとして最大の賞賛を送っているわけです。

パウロはこのテサロニケという異邦人の土地で、主イエスの再臨を表現するために「パルーシア」というギリシア語を使いました。この言葉は皇帝や王が公式に地方に訪問するときに使われた言葉でした。王の王であるキリストが再び来られる事の確実性と厳粛さを、地上の皇帝や王の地方訪問になぞらえたのです。イエスキリストの再臨の現実性を、確信をもって信じているかどうか、私たちの信仰の質にかかわってきます。

### 3. テモテの派遣

3:1 そこで、私たちはもはや耐えきれなくなり、私たちだけがアテネに残ることにして、  
3:2 私たちの兄弟であり、キリストの福音を伝える神の同労者であるテモテを遣わしたので、あなたがたを信仰において強め励まし、  
3:3 このような苦難の中にあっても、だれも動揺することがないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおりに、私たちはこのような苦難にあうように定められているのです。

パウロ一行がテサロニケの教会をいかに心配していたかがわかります。パウロとおそらくシラスだけがアテネに残り、すぐに信頼できる愛弟子テモテを送り返すことにしました。ここでパウロ一行が神に信頼し、困難に対して臨機応変に対応していることは注目すべき事柄です。今、私たちもコロナ禍にあって、教会も社会もゴールが見えない閉塞感が漂っています。しかし神はサタンの妨げも疫病も、ご自分の計画のために用いることができるお方です。

テモテという人物は歳こそ若かったのですが、パウロにとって分身のような存在だったようです。「私たちの兄弟であり、キリストの福音を伝える神の同労者であるテモテ」とありますが、他の手紙においても最大級の言葉をもって推薦しています。彼を送った目的は、「あなたがたを信仰において強め励まし、このような苦難の中にあっても、だれも揺することがないようにするため」でした。本当はパウロ自身がもう一度訪れて彼らを直接指導したかったでしょう。しかしそれができなかつたので、「もはや我慢できなくなつて」テモテを派遣したのです。

パウロ自身も宣教チームもここで神の訓練を受けたのではないかなと思います。パウロは能力と情熱と使命感のあふれる人でした。何でも自分でできるし、人に任せるより自分でやった方が早いというタイプのようにも見受けられます。しかし聖書を読むとパウロの宣教旅行は必ずしもパウロたちの計画どおりにいきません。サタンの妨害を受け、苦難の連続です。その中でこの時は神に信頼し、臨機応変に次世代の若者に任せました。これは想像するにパウロにとっては歯がゆく寂しい事だったかもしれません。しかしこれが神のご計画でした。

後にパウロは、コリント人への手紙でこうっています。

**3:5 アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であつて、主がそれぞれに与えられたとおりのことをしたのです。**

**3:6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。**

**3:7 ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。**

成長させてくださるのは神である。パウロにとっては神に信頼し、祈り待つという訓練の時であり、テモテにとってはパウロの代わりを務め、迫害の中にある人々の信仰のケアをするという福音宣教者、牧会者としての実践的な訓練の期間でした。教会は人の集団ではありません。教会は神ご自身のものであり、人の計画より、神のご計画が優先されなければいけません。

**3:4 あなたがたのところに行ったとき、私たちは前もつて、苦難にあうようになると言つておいたのですが、あなたがたが知っているとおりに、それは事実となりました。**

**3:5 そういうわけで、私ももはや耐えられなくなつて、あなたがたの信仰の様子を知るために、テモテを遣わしたのです。それは、誘惑する者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦が無駄にならないようにするためでした。**

先回「クリスチャンが敬虔に生きようとするならば苦難に会う。」と申し上げましたが。それと同じく教会も必ず苦難に会うと。パウロは言います。これは初代教会だけに当てはまるのではなく、おおよそ教会というものは必ず苦難に会うというのです。それは偶発的な事ではなく、必然的なものです。キリストの体である教会が必ず通らなければならないものな

のです。私たちの教会も例外ではありません。教会の受ける苦難には二通りのものがあります。一つは神からの試練です。神は試練を通して教会を清められます。そのかしらであるキリストにふさわしくしてくださるのです。もう一つは悪魔からの攻撃であり「誘惑」です。5節にある「**誘惑する者**」とは悪魔のことであり、悪魔は神の救いの業を破壊することが使命です。神は建てあげ、悪魔は破壊します。テモテは誘惑する者、サタンの業に騙されないように、信仰によって神に固く立つよう励ますために派遣されたのです。

## 適応

### ①明確な聖書的終末観を持ちましょう。

主の再臨への希望がクリスチャンの力の源です。明確な聖書的終末観を持つことで、救いの確信が強まります。どれほどの恵みが約束されているかを理解できれば、本当の喜びが湧いてきます。喜びはこの福音を伝えたいという思いを起こします。この世の祝福は将来の与えられる天の祝福の前味です。

### ②自分の考えに固執せず、主に信頼しましょう。

パウロ一行は、道が閉ざされたように思える時も、主を信頼して臨機応変に宣教しました。神はピンチをチャンスに。マイナスをプラスにしてくださいます。自分の考えや計画に固執せずに、主のご計画を求め、主に信頼して歩みましょう。

### ③サタンの常とう手段を知り、いつも祈りましょう。

サタンの常とう手段は「偽り」であり「だましごと」です。その目的は教会を混乱分裂させ、信頼関係を破壊することです。そして最終的にクリスチャンを神から引き離すことです。このことを理解し、いつも御言葉の光に照らされ、祈る者でありましょう。祈りは信仰生活のおまけではなく、宣教の最前線なのです。